

## リメディアル教育・学生支援の視点を採り入れた 英語（外国語）・リテラシー教育の改善・充実に関する研究

A RESEARCH ON IMPROVEMENT AND ENHANCEMENT FOR ENGLISH, FOREIGN LANGUAGE, AND LITERACY  
EDUCATION INCORPORATED WITH A PERSPECTIVE OF REMEDIAL EDUCATION AND STUDENT SUPPORT

岡村 光浩 基礎教育センター 准教授  
西村 太一 先端芸術学部まんが表現学科 教授  
古賀 俊策 デザイン学部プロダクトデザイン学科 教授  
見寺 貞子 デザイン学部ファッションデザイン学科 教授  
小倉 繁太郎 先端芸術学部まんが表現学科 教授  
佐久間 華 大学院芸術工学研究科 助手  
末延 岑生 兵庫県立大学 名誉教授、元・神戸芸術工科大学 非常勤講師

Mitsuhiro OKAMURA Center for Liberal Arts, Associate Professor  
Taichi NISHIMURA Department of Manga Media, School of Progressive Arts, Professor  
Shunsaku KOGA Department of Product Design, School of Design, Professor  
Sadako MITERA Department of Fashion and Textile Design, School of Design, Professor  
Shigetaro OGURA Department of Manga Media, School of Progressive Arts, Professor  
Hana SAKUMA Graduate School of Arts and Design, Assistant  
Mineo SUENOBU Professor Emeritus, University of Hyogo, /  
Former Lecturer, Kobe Design University

### 要旨

本研究は、学部学生の語学教育、その基盤となる基礎教育のあり方についての研究成果を学内外に還元・提案することを目的として企画された。

本研究は三つの柱により構成される：

- ①「学生支援の視点を採り入れた教育改善」の試みとして「聴覚障害学生に配慮した英語授業」
  - ②「ニホン英語」的アプローチ（error-tension free な環境重視）を採り入れたリメディアル授業の試行
  - ③マインドマップ等、視覚イメージを重視する学習法・思考整理法の導入可能性の探究
- 障害学生への配慮やコンテンツのビジュアル化を意識した授業はリメディアル教育の方法論としても有効であった。これらを既存のカリキュラムにどう組み込んでいくかが今後の課題である。

### Summary

This research project aims to rethink study results regarding the suitable form of language education for undergraduate students and fundamental education as its foundation, and make suggestions thereon.

The study is comprised of three parts:

- 1) “English classes with consideration given to hearing impaired students”, as a trial of “education improvements incorporated with a perspective of student support”
- 2) Remedial trial classes incorporated with an approach of “Nihon Eigo” (emphasizing an error-tension free environment)
- 3) Examination of the possibility of introducing learning and thinking methods emphasizing visual images such as mind maps

Classes with consideration given to students with disabilities, or with contents visualized were effective as a methodology of remedial education. How to incorporate them into existing curriculum is the task to perform.

1 研究の目的

基礎教育センター<sup>1</sup>語学部門では、「学生のニーズに応え更に興味を持たせる方向でのカリキュラム再構築」ほかの学長諮問<sup>2</sup>を受け、英語・外国語教育の更なる充実・改善に資するべく、これまでも試行錯誤を続けてきた。

本研究は、上記の過程で得られた知見（岡村 2009, 2010a, 2010b）を踏まえ、「『大学が大学であり続けるために』何をなすべきか」との問題意識の下、学部学生の語学教育、その基盤となる基礎教育（日本語も含む）のあり方、更に大学院におけるアカデミック・リテラシー教育との連携を今後どうすべきかについての研究・試行を続行し、その成果を学内外に還元・提案することを目的として企画された。

研究代表者が社会貢献活動として参加している（多くがコミュニケーション能力に不安を抱える）成人発達障害当事者支援活動等から得られた知見等も踏まえ、基礎学力の強化とメンタル面を含む学生支援の連携を不可分のものとして捉え、「ワンストップ」での両者のサポートを視野に入れたリメディアル教育の仕組みについて研究・施行することも視野に入れつつ、現在も活動中であるが、本稿では2012年度共同研究として実施されたプロジェクトについて報告する。

2 研究の方法

上記の目的を達するため、2012年度の本研究においては、以下の3つの柱を中心としたプロジェクトを企画した。

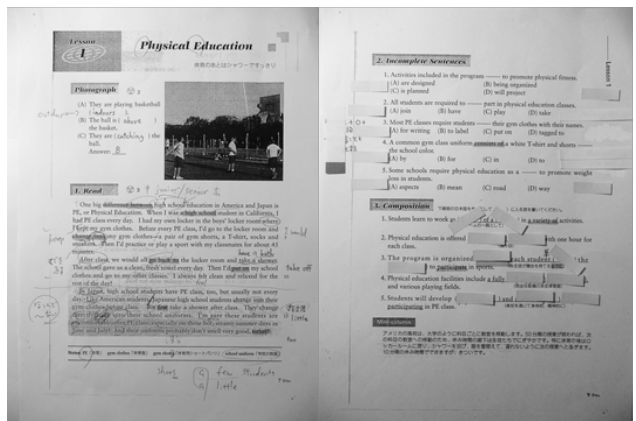
- ①「リメディアル教育」先行事例の調査並びにメンタル面を含む学生支援との連携可能性の探究
- ②「ニホン英語」的アプローチ（error-tension freeな環境重視）を採り入れたリメディアル授業の試行
- ③マインドマップ等、視覚イメージを重視する学習法・思考整理法の導入可能性の探究

状況の変化により特に①については内容の大幅な変更を余儀なくされたが、それについては後述する。

3 「学生支援の視点を採り入れた教育改善」の試みとして「聴覚障害学生に配慮した英語授業」

ひとつ目の柱であった「リメディアル教育」先行事例の調査並びにメンタル面を含む学生支援との連携可能性の探究について、研究代表者として企画段階では学習障害等の発達障害を意識していたが、以下の理由により計画立案時の構想から大幅な計画を余儀なくされた。すなわち、2012年度に重度の聴覚障害学生が本学に入学したことに伴い、英語科としても事前の準備期間がほとんどないまま「総合英語」に学生を受け入れることとなったため、「学生支援の視点を採り入れた教育改善」の試みとして「聴覚障害学生に配慮した英語授業」の探究が最優先事項となったためである。

上記に緊急に対応するため、岡村を中心に、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)に加入しての情報収集、姫路聴覚特別支援学校・筑波技術大学訪問などを行い、得られた知見を授業にフィードバックした。



(写真1) プロジェクターに投影した教材の例

出典：ジョージ・トラスコットほか、『Eye on America and Japan（そのまま日米比較）』、南雲堂、2009年

聴覚障害学生と健聴学生の混成授業を行うにあたっては、教材をプロジェクターで投影、事前には書き込み付箋で隠したキーワードや演習問題の解答を付箋で隠し解説しながら進行するなど（写真1）、授業内容の可視化に配慮しつつ、1年間「総合英語」(I・II)の授業を実施した。授業実践の詳細については岡村(2013)に詳述したが、学期末の授業アンケートにおいても上記に配慮した授業は通常の授業よりも学生から高い評価を得ており、後述の「KDU

フラッシュカード」やマインドマップなどの授業法・思考整理法同様、「視覚イメージ」を重視したアプローチの有効性・有用性を示している。

#### 4 「ニホン英語」的アプローチ（error-tension free な環境重視）を採り入れたリメディアル授業の試行

二つ目の柱である本項目については、本学紀要収録の拙稿でも採り上げてきた（岡村 2010b, 2011）「ニホン英語」（末延 2010）の唱道者である末延の監修により選んだ語句と、本学学生が描いたイラストを組み合わせた「KDU フラッシュカード」を試作し、それを用いた試行授業を行った。（写真2）



（写真2）「KDU フラッシュカード」を用いたゲーム

学生が自ら描いたカードを使用し、ゲーム形式でパターン・プラクティスを行うことで、必要ではあるが機械的な退屈さに陥りかねない反復練習を、楽しく飽きずに続けることを可能にしていた。<sup>3</sup>

#### 5 マインドマップ等、視覚イメージを重視する学習法・思考整理法の導入可能性の探究

人の認知特徴と思考を、聴覚に重きを置いた言語記憶をもとに行う「言語思考」と、視覚に重きをおいた映像記憶をもとに行う「映像思考」に大まかに分類するとき（岡 2010）、一般社会・一般大学においては前者に優れ言語でものごとを考える聴覚優位・言語思考の人が多数派を占める。しかしアート&デザインの大学である本学の学生には、後者に優れ、いわば「映像で思考」する、視覚優位・映像思考を得意とする学生が平均より多くなることが想定し得る。

そのような学生に対する学習法・思考整理法の一つとしてトニー・ブザン(2013)の「マインドマップ」を採り上げ、大学院特別講義として阿久澤騰氏<sup>4</sup>を講師に招き、マインドマップ（写真3）と氏の提唱するビジュアル思考法である「ストーリー思考」（写真4）についてのワークショップを実施した。<sup>5</sup>



左：（写真3）受講者が作成したマインドマップ

右：（写真4）受講者が作成した「ストーリー思考」のフォーム

思考を可視化し整理・組み立てるツールとしてのマインドマップ/ストーリー思考は、便利なツールとして受講者にも大変好評で<sup>6</sup>、ワークショップを2013年度にも継続して実施した。今後は更に学部での導入の機会についても探っていきたい。

#### 6 今後の課題

障害学生への配慮やコンテンツのビジュアル化を意識した授業はリメディアル教育の方法論としても有効であることが確認された。生きづらさを抱えた学生の支援も視野に入れつつ、これらを既存のカリキュラムにどう組み込んでいくか、引き続き研究を続けたい。

<本研究による成果物（フラッシュカードを除く）>

##### 1. 学術論文

岡村光浩(2013)、「聴覚障害学生に配慮した英語授業の試みー神戸芸術工科大学における情報支援の経験を中心に」、『KELT（神戸英語教育学会紀要）』、28号、2013年、pp.31-51

末延岑生(2012)、「ニホン英語(Open Japanese)の類型化研究(形態編)ーアジア英語(Open Asian)を礎として」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』、2012、2012年、

<http://id.nii.ac.jp/1100/00000008/>

末延岑生(2013a)、「ニホン英語(Open Japanese)の類型化研究(語順編)」、兵庫県立大学『人文論集』、48巻、2013年、pp.93-120

末延岑生(2013b)、「ニホン英語(Open Japanese)の類型化研究(統語編(時制))」、*Look! We Have Come Through*(日本「アジア英語」学会創立15周年記念誌)、2013年、pp.117-141

## 2. 学会発表

岡村光浩、「聴覚障害学生に対する情報支援の試み」、日本国際情報学会2012年度研究発表大会、日本大学通信教育部(東京都)、2012.12.8

## 3. その他の記事

岡村光浩(2013b)、「「凸凹」と向き合う・「凸凹」を味方にする」、地球市民の会『地球市民登録ニュース』、第62号、pp.10-11、2012.11

## 4. 招待講演

末延岑生、「ニホン英語は世界で通じる」、崇城大学教養講座、崇城大学(熊本市)、2012.6.1

## 5. 新聞記事

末延岑生(インタビュー・全5回)「【新・関西笑談】ニホン英語のススメ」、産経新聞大阪夕刊、2012.5.21-25

## 6. パネリスト・コメンテーター等

岡村光浩、「発達障害の理解について」(コメント・話題提供)、神戸市外国語大学ボランティアコーナー「障がいの知識を共有するセミナー」、神戸市外国語大学、2012.7.1

岡村光浩、「聴覚障害学生の修学支援について」(事例発表)、神戸芸術工科大学FD研究会、神戸芸術工科大学、2012.11.21

岡村光浩、「「メイドインジャパン」と「ソフトパワー」・「クールジャパン」、そのための武器としての「ニホン英語」について」(コメンテーター)、神戸芸術工科大学共同研究講演会『ファッションデザイン文化交流ーアジアのファッション市場からこれからのデザイン教育を考えるー』、神戸芸術工科大学、2013.2.2

## <参考文献>

岡南(2010)、『天才と発達障害ー映像思考のガウディと相貌失認のルイス・キャロル』、講談社、2010年

岡村光浩(2010a)、「神戸芸術工科大学における英語教育についてー現状と展望」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』、2009、2010年、

<http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html>

岡村光浩(2010b)、「初年次教育・基礎教育についての一考察ー神戸芸術工科大学における英語教育を中心に」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』、2010、2010年、[http://kiyou.kobe-du.ac.jp/wp-content/uploads/2010/1/1/4\\_okamura.pdf](http://kiyou.kobe-du.ac.jp/wp-content/uploads/2010/1/1/4_okamura.pdf)

岡村光浩(2011)、「リメディアル教育・学生支援の視点を取り入れた基礎教育についての一考察ー神戸芸術工科大学における英語教育を中心に」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』、2011、2011年、

[http://kiyou.kobe-du.ac.jp/wp-content/uploads/2011/1/1/3\\_okamura\\_2011.pdf](http://kiyou.kobe-du.ac.jp/wp-content/uploads/2011/1/1/3_okamura_2011.pdf)

末延岑生(2010)、『ニホン英語は世界で通じる』、平凡社(平凡社新書)、2010年

末延岑生(2011)、「Open Japanese(ニホン英語)をデザインする」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』、2011、2011年、

[http://kiyou.kobe-du.ac.jp/wp-content/uploads/2011/1/1/4\\_suenobu\\_2011.pdf](http://kiyou.kobe-du.ac.jp/wp-content/uploads/2011/1/1/4_suenobu_2011.pdf)

トニー・ブザン(2013)、『ザ・マインドマップ』新版、ダイヤモンド社、2013年

1 旧・デザイン教育研究センター。

2 2010年開催の外国語担当講師懇談会にて。

3 授業形式の詳細については岡村(2011)、末延(2011)を参照。

4 (株)ファランクス経営企画室、元日本大学芸術学部助手。

5 阿久澤騰、「ワークショップ「マインドマップとストーリー思考のススメ」、神戸芸術工科大学大学院にて」、<http://www.akuzawa.net/?p=2582>、ワークショップ「マインドマップとストーリー思考のススメ」無事終了のご報告 <http://www.akuzawa.net/?p=2642>、2013.7.31 閲覧

6 アカデミック・リテラシーの授業では、英文アカデミック・ライティングの基礎演習を行っており、その一環として受講者には「自分の研究テーマを英語で説明すること」を課している。しかし(学術論文ではなく)修了作品についての説明をまとめるには標準的なアカデミック・ライティングの作法や論文構成が馴染まないこともあり、代替的な手法を模索していた。